



Title	<文献紹介> フィリップ・ガロワ、ジェラール・フォルジー編 『ベルクソンと神経科学』 Philippe Gallois et Gérard Forzy (dir.), Bergson et les neurosciences, Les Empêcheurs de tourner en rond, 1997.
Author(s)	天野, 恵美理
Citation	メタフシカ. 2014, 45, p. 163-168
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51546
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《文献紹介》

フィリップ・ガロワ、ジェラルド・フォルジー編

『ベルクソンと神経科学』

Philippe Gallois et Gérard Forzy (dir.), *Bergson et les neurosciences*, Les Empêcheurs de tourner en rond, 1997.

天野恵美理

0. はじめに

本書は、ベルクソンの『物質と記憶』（1896、以下 MM）の出版百周年を記して開催されたシンポジウムの内容を取めた論文集である。本書の特徴は、フレデリック・ヴォルムス（Frédéric Worms）らベルクソン研究者と、神経生物学者ジャン・ドラクール（Jean Delacour）ら神経科学に精通している研究者とが、同じ土俵に立って「ベルクソンと神経科学」について議論していることである。したがって、本書はベルクソン哲学と科学との関係について考えさせてくれる格好の素材であると思われる。

ところで、本書を通じて浮かび上がってくると思われる主張は、MM においては神経科学は中心的問題ではない、というものである。実際、科学の側からベルクソンの神経学説を独断的だと糾弾しているジャン＝ノエル・ミサ（Jean-Noël Missa）も、また MM の理論の現代における妥当性を肯定しているヴォルムスも、各々の仕方、この主張については意見を同じくしている。

そこで本稿においては、次のような仕方、本書の紹介を行う。まず 1 節において、現代の神経科学の見地から MM の神経学説を検証するとどのようになるのかをドラクールの論文（pp.22-7）を参照しつつ簡単に確認し、それから、科学史的観点から見て MM においては神経科学は主要問題ではないとするミサの論文（pp.65-83）をも参照する。次いで 2 節において、では MM におけるベルクソンの哲学にとってそもそも何が問題であるのかを、ヴォルムスの論文（pp.85-108）とともに今度は MM そのものに目を向けることで確かめていく。このような道行きにおいて本書の利点が示されると考えられる。

1. ベルクソン哲学の手前——科学的見地から

まずは、ベルクソンの神経学説の検証に限定した研究であるドラクールの論文「『物質と記憶』現代神経科学に照らして (*Matière et mémoire, à la lumière des neurosciences contemporaines*)」をごく簡単に見ていこう。ドラクールは、神経科学の見地から、ベルクソンの幾つかの理論を個別的に検証している。たとえば、「神経系の活動を運動の伝達のようなものとみなすという…「機械的な」メタファーは、誤っている」(p.24)。というのも「神経生理学的な活動は、物理化学的・生化学的な性質をもつ」(ibid.) からである。あるいは、「[「脳内イメージ (*imagerie cérébrale*)」は、心的表象が脳に諸基盤をもつことを示すのみならず、これら諸基盤が知覚の諸基盤と共通のものを持つということも示す]。したがって、知覚と表象とのあいだにはベルクソンの主張するようなラディカルな断絶は無い (p.25)。

このような研究は、それ自体に一定の意義はあるにしても、一種の行き止まりを示すものであるから、少なくとも上のような事実の確認に留まっているかぎりその先が望めないものである。現代科学の見地から上のような指摘を受け、現代においてMMを読む意義を改めて考えると、ベルクソンがMMにおいてそもそも何を問題としていたのかを正確に見極めていく必要があると言えるだろう。

続いてミサの論文「『物質と記憶』第二章の実証的批判 (*Une critique positive du chapitre II de Matière et mémoire*)」を見ると、そこでは、ベルクソンが問題としたのは大脳局在の理論ではないと言われる。現代に至るまで多くの解釈者たちによって、ベルクソンはMMにおいてプロカの研究に端を発する大脳局在の理論を標的としているとみなされてきた。しかしながら、ミサによればこの見方は支持し難い。というのも失語症の歴史を振り返ると、プロカがまず1861年に見出した「前頭葉の損傷によって引き起こされる運動的失語症」と、その後ウェルニッケが1874年に見出した「側頭葉の損傷によって生み出される感覚的失語症」とのあいだには、「注目すべき相違」があるのであって、ウェルニッケの仕事こそが、「ベルクソンがMMにおいて攻撃するところの、失語症の一連の連合論的説明に道を開いた」ためである (p.80)。ミサによれば、「MMにおいてベルクソンは、攻撃の狙いを連合論者に定めたのであって、局在論者に定めたのではない」(ibid.)。というのも「MMにおいてプロカはほとんど問題になっていない」のであり、対して「連合論者はつねに引き合いに出される」(ibid.)。つまり「ベルクソンにとっては心的なものは脳的なものの写しではない」がゆえに、「心的なものを脳的なものに還元すると主張する連合論者」こそが標的にされたというわけである (p.81)。こうしてミサの論文は、「生理学的な諸所与は、それらの偏在にもかかわらず、ベルクソンの形而上学的心理学においては脇役を演じているだけに過ぎない」(p.83)と締めくくられる。

2. ベルクソン哲学の内側へ——「意識の諸平面」の理論の考察

2. 1 「意識の諸平面」の理論

では、ベルクソンにとっての中心的な問題は何なのか。我々は以下、ヴォルムスの論文「ベルクソンの意識の諸平面の理論：『物質と記憶』の成り立ち、構造そして意義 (*La théorie*

bergsonienne des plans de conscience : genèse, structure et signification de *Matière et mémoire*)」に即して MM そのものに目を向けていくこととする。

ヴォルムスは、大脳局在の批判等に比べると地味に思われる「意識の諸平面」の理論という心理学の理論に注目する。というのもベルクソンは MM の序において、この理論を MM の「出発点」として指示したからである。その一方で、「この理論は、一見して派生的な仕方第三章において提示されるのみである」(p.86)。そこでヴォルムスの考察は、「この理論がいかにして MM という複雑な書物の、それゆえまたそこで認められる他の諸理論の、起源たり得るのかを理解すること」、そして「MM の複雑な構造が、しかしながらこの理論に還元されることなく」、「いかにしてこの理論に結びつけられることが出来るのかを理解すること」という二点を目的とする (ibid.)。つまりヴォルムスの考察は、「意識の諸平面」の理論に基づいて、MM の起源と構造とを理解しようとするものである。

以下、ヴォルムスの節区分に倣い、2.2 で、固有に心理学的な理論としての「意識の諸平面」の理論の内実についての考察を見ていくこととし (この考察は MM 二・三章に関わる)、2.3 で、この理論が MM の他の諸部分 (MM 一・四章) をどのように巻き込んでいるかについての考察を見ていくこととする。ヴォルムスによれば、「神経学的ないし形而上学的な MM の諸主要理論は、恐らく、大変一般的なこの心理学的理論から出発してはじめて理解される」(ibid.)。

2. 2 心理学的理論としての「意識の諸平面」の理論の射程

2.2.1 ヴァリエーションの基準

意識の諸平面の理論は、確かに MM 三章において連合説への批判の最後の段階にあらわれるが、こうした見方だけでは、この理論の一般的な射程を直接的に把握するためには十分ではない (p.87)。ヴォルムスによれば、「個人的な記憶があらわれてくるとき、重要なのは、諸記憶自体の多様性、ヴァリエーションである」(p.89)。たとえば、「私の耳に対して発音された外国語の単語は、私に、この言語一般のことを考えさせることも出来るし、あるいは、この単語をかつてある仕方で発音したある声のことを考えさせることも出来る」(p.88 / MM188¹)。このように諸記憶の内容の深さは可変的なものであり、「意識の諸平面の理論が解明せねばならないのは、まさしく、この基本的なヴァリエーションなのである」(p.89)。さらに、外国語を聞き取るということは、記憶による理解ないし解釈であるとともに、知覚でもある (p.88)。というのも、「聞こえた語によって語の記憶が喚起されるようにするためには、少なくとも耳がその語を聞かなくてはならない」(MM120) からである。この語はある同じ語として知覚されているのでなければならない。したがって、問題となっているのは、ヴァリエーションを容れる、つまり内容の可変的な深さをもつ諸記憶と、ヴァリエーションを容れない知覚とが、ヴァリエーションの基準において区別されつつも実践的に収束しているということなのである。問題を次のように言い換えることも出来る。「諸知覚と諸記憶との本性の差異と機能の収束とを一度に説明するためには、「連合」

¹ MM からの引用は、*Matière et mémoire*, Presses Universitaires de France., 2008. による。

はいかなる仕方でも働かねばならないのか」(p.89)。そして、ベルクソンは、記憶と知覚との結びつきについて、「知覚が機械的に諸記憶の出現を規定する」(p.91-2 / MM107-8) という仕方での連合の説明——これではいま述べたような差異と収束のダイナミズムを説明することが出来ない——を退け、「諸記憶こそが自ずから知覚の面前に赴く」(p.92 / MM108) という仮説を採用することになる²。

ヴォルムスによれば、「ベルクソンにとってははじめに決着をつけるべき問題」(p.91) は、こうした心理学的問題なのである。そして、「心理学的争点こそが、大脳局在の問題のような生理学的諸問題を通じての回り道」を経験的検証として「課しまた正当化する」(p.90)。事情を詳しく見ていこう。「諸知覚から諸記憶への自動的な関係というのは、もしそれが確立されることが出来るとするならば、脳のある中枢から他の中枢への伝達として考えられ得る」が、反対に、記憶が知覚の枠へと自発的に自らを差し込むとする考え方は、「ベルクソンによれば、ある場所から他の場所への脳内運動の効果をそこにみとめることを禁じる」(p.92)。というのも、確かに記憶力のオペレーションにおいては、知覚に関する諸記憶がますますあらわれるという、知覚に発する「伝播」が認められるのではあるが、ベルクソンの考えでは、(直後で見ると)、記憶の知覚への差し込みが、知覚から記憶への伝播に先立つと言えるのであり、そうすると、「差し込みは伝播ではない」ということになる (p.92)。だから、結果として、知覚への記憶の差し込みは、脳における場所の移動としてみなされることは出来ないと考えられる。要するに、「この心理学的問題が、局在の問題を巻き込む」(ibid.) のであって、その逆ではない。

知覚から記憶への伝播に対する、知覚への記憶の差し込みの先行性は、次のように説明される。確かに記憶力のオペレーションにおいてはますます多数の諸記憶があらわれるのであるが、しかしその都度、「記憶は知覚された対象に戻らねばならず、その知覚を豊かにせねばならない」のであり³、まさにそれゆえにこそ、こうしたオペレーションが「そこから決して離れること出来ない」「根底の所与」が知覚においてすでに立てられているのでなければならない (pp.92-3)。このようなわけでヴォルムスによれば、「ベルクソンの記憶力の特徴的なオペレーションは、記憶を探しにいくところの想起であるというよりも、知覚のうちへと記憶を推進させるところのアクチュアリゼーションなのである」(p.93)。そして、この「根底の所与」すなわち「知覚の枠組みが、変化 (varie) しないものである」のに対して、記憶力のオペレーションによる「枠組みの再創造は、多数の度を容れる」(ibid.)。

2.2.2 局在論への反駁と固有に心理学的な問題への回帰

今度は、以上のような心理学的基準が、局在論の反駁へと実際に導くことが出来る事情が確認される。「ベルクソンによれば、局在に反論する本質的な論拠は、「この理論が一方では心理学的

² ベルクソンは連合の事実そのものを否定しているわけではないのであり、むしろ、連合の事実を説明するために、線形的な連合論を、意識の諸平面の理論に置き換えたと言えるだろう。

³ 反対に、連合を「一本の線に沿って進行する」ような仕方だと考えると、「そこには直線的な進行があるわけで、それによって精神はますます対象から遠ざかってゆき、もはや対象へと戻ってくることはないだろう」(MM113-4)。

分析によって、他方では病理学的諸事実によって導かれる奇妙な矛盾」(MM140)に基礎をもつ」(p.94)。事情は次のようなものである。すなわち、一方では、「病理学が、ある種類の諸記憶の全体が我々から消えうるにしても、対応する知覚能力は無傷のまま残るということを教えている」(MM141)。実際、「精神盲は見ることを妨げないし、精神聾もまた聞くことを妨げない」(ibid.)。そこで局在論者は、「知覚と記憶とに別々の神経要素を割り当てねばならない」(ibid.)。ところが、「最も初歩的な心理学的観察」が示すように、「ある記憶はより明晰になり強まるにつれて、正確にいつ根本的変化が働くともなく…知覚になろうとする」(ibid.)。そうであるなら、先のような単なる場所の区別においては、こうした心理学的観察は「所在をなくしてしまう」(p.95)。以上が局在論が突き当たる矛盾である。ベルクソンによれば、誤りは、記憶と知覚という「二つの項の相違にあるのでも統一にあるのでもなく、これら二つの項の本性の相違を脳の空間における場所の相違として読み替えようとすることに存する」(p.94)。要するに、「場所のカテゴリーそのもの」ないし「空間性」が、記憶の働き方にとって不適合なのである (p.95)。研究者たちは病理学的局面のみを偏重しがちであるが、病理学的局面と心理学的局面とのあいだの「この矛盾のみが、局在論への「反駁」としての役割を果たす」(p.94)。

このようなわけで、経験的で病理学的な分析がもたらしたものは、結局、記憶力の働き方のヴァリエーションを「脳内の空間における場所の割り当てに翻訳することの不可能性」という「ネガティブな結果」であり、今度は「このネガティブな結果が、意識の諸平面の固有に心理学的な分析へと回帰することを課す」(p.95)。こうして、心理学的問題の「自律性」(ibid.)が担保されることになるのである。

固有に心理学的な分析へのこの回帰が、MM 二章から三章への移行をしるしづけている。三章においては諸記憶の無意識的な自己保存という有名なテーゼがあらわれるが、しかしここでは、諸記憶の無意識的な自己保存それ自体よりも、意識的知覚と無意識的諸記憶との「根本的対比が授ける基準」(ibid.)のほうが本質的である。意識の諸平面が、諸知覚と諸記憶とのあいだの本性の差異と機能的・実践的収束とを一度に説明するためのモデルとして考えられていたことを思い出そう。結局、「我々の意識の様々な諸「平面」がそれであるところの」、無意識的諸記憶と意識的知覚とのあいだの「媒介の様々な度」(p.96)こそが、諸記憶の無意識的な自己保存を、条件として想定しているのである。

2. 3 「意識の諸平面」の理論と MM の構造

続いて、意識の諸平面の理論がどのように MM の残り（一章と四章）を巻き込んでいくのが簡潔に説明される。

まず一章において示される知覚理論との関係について。記憶が知覚の枠組みに差し込まれることが出来るはずであるなら、この枠組みはすでに心理学的性質のものであるはずである。「宇宙は固定的 (fixe) であり、外的で客観的であって、必然的諸法則に従う」ものであるが、しかしながらなおかつ、それが知覚される以上、「たしかに心理学的であり、諸記憶そのものに対して差し込みの枠として役立つ」はずなのである (p.103)。「イメージという概念の謎めいた使用法」

(ibid.) が説明しているのは、知覚される外的対象そのもののこうした本性である⁴。こうして、MM 一章は、「諸記憶と諸知覚とのあいだの本性の相違と可能的収束という、二つの必須要素を、諸平面の理論に対して与える」(ibid.)。

さらに、意識の諸平面の理論は、「形而上学的アナロジー」を通じて、四章において示される「実在の諸度の理論」へと導くとされる (p.104)。「我々の「持続」の「リズム」が物質の持続のリズムとは異なっているということにおいて、我々は物質そのものから隔てられているが、その一方でまた、両者の持続のリズムの相違は程度の相違であり、物質そのものの存在をアナロジーによって考えることを我々に可能にする (ibid.)。意識の諸平面の理論はいまや、我々と物質そのものとのあいだの、相違とまた思考によるその超越とを、我々に一度に理解させるのを可能にしているのである (ibid.)。

このようなわけで、ヴォルムスによれば、意識の諸平面の理論は、固有に心理学的な領域において自律性を保ちつつも、「MM 全体がその方向を向いている」(p.105) のものとして、本書全体の構造を規定しているのである。

おわりに

前節ではヴォルムスの論文に即して MM の起源と構造について見てきたが、重要なのは、こうした分析を通じて、「異なる理論領域をまとめて有機的に結びつけることに腐心している精神の哲学」(p.102) がますます解明されるということである⁵。ヴォルムスによれば、MM における「精神の哲学とは…、認識の経験的な発生源 (foyer) の周囲に、諸々の問題を序列化して配置することである」(p.107)。いずれにしろ、MM 読解においては、一冊の書物としての MM の論証構造を織りなす複雑に錯綜した糸を丹念に解きほぐす作業が求められると言えるだろう。このような作業を通じてこそ、心理学、神経科学、そして形而上学といった諸領野の連関が理解されるはずであるし、さらにその上で、現代の心理学や認知科学等への適用の可能性についても吟味することが出来るだろう。

ベルクソンの神経学的主張自体は端的であるが、その一方で、ヴォルムスも結論において述べているように、MM の読解にはなお継続され深められる余地がある。だから、ベルクソンの神経学的主張が現代の神経科学の見地から見ていかに容認出来ないものであろうとも、MM の哲学的試みにおけるその位置を正確に見定めることなしにその価値をないがしろにすることは出来ないだろう。「ベルクソンと神経科学」を巡る議論は、それゆえ、ベルクソン哲学において、存外に意義深い問題提起となっていると思われるのである。

(あまのえみり 哲学哲学史・博士後期課程)

⁴ 「諸記憶は、諸事物そのものではなく、私の知覚がそこにおいて切り抜く諸イメージに差し込まれる」(p.103)。

⁵ 「MM の全体的構造は、精神の哲学における意識の地位と呼びうるものを参照している」(p.87)。